

モダンダンスコンクールにおけるジュニア期の作品に頻出する基礎的な動きの整理

三木麻衣¹⁾・寺山由美²⁾

1) 筑波大学大学院体育学学位プログラム

2) 筑波大学

1. 研究背景・目的

各地で開催される舞踊コンクールは若手ダンサーの登竜門であり、技術や表現力を高める重要な契機となっている。舞踊コンクールに設けられる部門には、クラシックバレエ部門のほかに、モダンダンス部門や現代舞踊部門といった名称でジャンル分けされている場合が多い。後者の部門は、クラシックバレエとは異なり、モダンダンスや現代舞踊、コンテンポラリーダンスなど、多様なスタイルを含む総合的なカテゴリとして扱われている。モダンダンスは、クラシックバレエの様式的側面に対するアンチテーゼとして誕生した歴史的背景をもち、身体運動の技術のみならず、表現の自由さや創造性を重視する点に特徴がある。本研究では後者の部門に参加するダンスをモダンダンスと定義する。

日本のモダンダンスは、民間教室による伝承的指導が主流であり、指導者の経験知に基づくことが多い。そのため、基礎技術を体系的に学ぶ仕組みは十分でない可能性がある。江口（1968）は基本運動を考案し、運動原理の体系化を試みたが、その後モダンダンスはさらに多様化している。このことから、モダンダンスのコーチングにおける基礎的な運動技術を明らかにするためには、まずは現代の作品に含まれる動きの現状を把握する必要があると考えられる。本研究では、技術の基盤を培うために体系化が特に求められるジュニア期に注目し、作品の振付に頻出する【動作】を整理することを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、筆者がジュニア期に踊ったソロ作品を対象とし、その動画を分析対象とした。モダンダンスの世界には、作品やダンサーの著作権を保護する観点から、他の稽古場から作品動画を借用できないという文化的背景がある。そのため、他者の作品を研究対象とすることが極めて困難であることから、筆者自身の作品を対象とすることとした。動画分析は、①データフォーマットの作成、②【動作】の分類、③数値の集計の順で行った。データフォーマットの作成にあたっては、村瀬・寺山（2020）を参考に、作品動画の時間に沿って、【動作】を開始した時間、【動作】を実施していた時間、ダンサーの【動作】の概要を文章で記録した。

3. 研究結果・考察

本稿では作品 A の結果を抜粋して示す。作品の振付を【動作】で分類した結果、総計 147 の【動作】で振付が構成されていることが明らかとなった。分類結果を頻出順に整理したグラフが、以下の図 1 である。

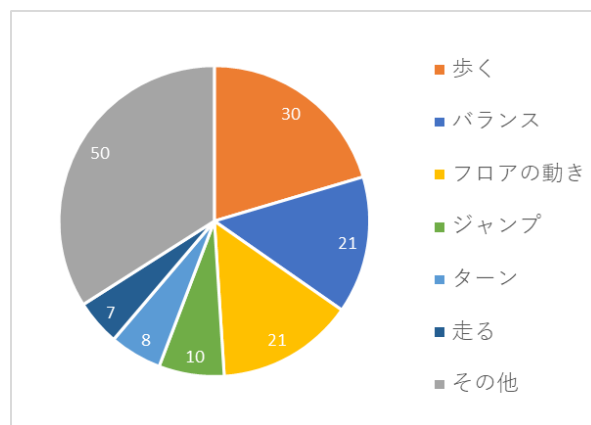


図 1 作品 A の【動作】の内訳(上位 6 つ)

最も頻出したのは、歩くであった。この【動作】は、単に空間を移動する動きとして用いられている場合もあれば、次の【動作】を行うための準備動作として用いられる場合も多くみられた。

次に多かったのは、バランスであった。軸脚が片脚で形が静止するもののほか、非軸脚が動きを伴うものや、両脚で支持するものなど、様々な形態のバランスが確認された。

また、バランスと同数みられたのは、フロアの動きであった。フロアの動きは、座位姿勢の【動作】、手を床に付けている【動作】、頭の高さが立位姿勢の腰の高さ以下である【動作】を含めて分類した。そのため、コンテンポラリーダンスにみられるシットロールや、新体操競技にみられるアクロバットの【動作】に限らず、膝立ちや床に倒れ込む動きも含まれている。

これらの分類とは別に、特定の部位の動きで分類した際、背骨を軸にして自転する動きが多く確認された。この動きは、147 の【動作】の内 36 の【動作】にみられた。自転した回転数は【動作】によって異なるが、この結果から、身体の面を変えながら動いていることが示唆される。

今後は、その他の 5 作品も同様に分析を行い、総合的に考察を進める予定である。

4. 引用参考文献

江口隆哉（1953-1972）、現代舞踊 1-20.

村瀬瑠美, 寺山由美（2020）身体表現活動におけるオノマトペが幼児に想起させるイメージと動き：オノマトペの性質・意味内容に着目した実験から。体育学研究, 65 : 35-52.